

原 著

胃癌検診に関する意識と受診行動

太布 春美* 高嶋美穂子**

胃癌検診受診率は年々増加してはいるものの、岩手県において昭和61年度では17.9%にすぎない。今後の未受診者対策の資料に供するため、胃癌検診受診者と未受診者の意識や受診行動に及ぼす影響を質問紙法により調査・検討した。

対象は宮古市津軽石地区の35才以上の住民で、昭和58年度以降の胃癌検診受診経験者と未受診者に分けて検討した。

未受診者の検診体制に対する希望として、「自分の都合の良い日または時間に受診できれば良い」や「短時間で検診が終れば良い」とするものが多く、これらの検診体制の整備が未受診者対策として有効と思われた。

また、受診者の受診動機では健康に対する不安が多くを占めていた。

キーワード：胃癌検診，受診率，受診行動，未受診者対策

I はじめに

我が国の全悪性新生物死亡における胃癌の死亡は部位別悪性新生物訂正死亡率の約4分の1を占め依然として高率である。しかし、胃癌の訂正死亡率も高かった昭和35年の人口10万対男48.3，女30.1から男女とも年々減少しており昭和61年には男25.1，女14.3となっている。これは、健康教育により胃の検診を受ける人が増えたことや、X線・内視鏡による診断技術の進歩が大きく貢献しているといえる。

「ガンの特効薬…それは“検診”」といわれるように定期検診で早期に発見し、早期に治療することにより100%に近い5年生存率が期待でき、今後更に胃癌による死亡率を減少させることができる。しかし、早期胃癌の時期は殆ど自覚症状がなく、自分は健康であり、胃癌検診を受ける必要がないと考えている人が多い。

宮古市においても、胃癌検診受診率は年々増加しているものの、昭和61年度では岩手県17.9%に

対して宮古市は14.2%と依然として低率である。

そこで、今後、未受診者への働きかけの方法を考える資料に供するため、胃癌検診受診者と未受診者の胃癌検診の体制に関する意識及び受診行動に及ぼす影響を検討したので報告する。

II 研究方法

1. 調査対象

宮古市の市街地より約10km南にあり、昭和63年度における検診事業のモデル地区である津軽石地区に居住する35歳以上の者を対象とした。対象者を、昭和58年度以降一度でも胃癌検診を受診した受診群と一度も受診したことの無い未受診群にわけて調査を行なった。

配布数276，回収数218，有効回答数211(受診群104，未受診群107)であった。その内訳を示したのが表1である。

2. 調査期間及び方法

昭和63年9月24日から9月29日までの期間に質問票を用い、被調査者の自記式調査を行なった。

* 岩手県立衛生学院保健学科昭和63年度実習生 (現玉山村役場)

** 岩手県立衛生学院保健学科昭和63年度実習生 (現川井村立小国小学校)

質問票の配布及び回収については保健推進委員に依頼した。

なお、対象者の選定は行政区毎に未受診者の名簿を作成し、未受診群についてはその名簿の中から、受診群については名簿以外の者の中から保健推進委員が行なった。

統計学的有意差の検定は全て、 X^2 -検定にて行なった。

3. 調査項目

調査項目は、胃癌検診を知った方法、希望検診

表1 対象者の状況

		受診群	未受診群
性	男	32	56
	女	71	49
年 齢	35 ~ 39	4	9
	40 ~ 49	33	33
	50 ~ 59	34	25
	60 ~ 69	25	20
	70 ~	8	20
職 業	会社員	5	14
	農業	17	15
	漁業	7	5
	主婦	41	21
	自営業	13	10
	無職	12	20
	その他	9	22

事業、検診の必要性の認識、健康の自己評価、実行している保健行動などであった。

4. 調査地区における胃癌検診体制

宮古市における胃癌検診の体制を示したものが図1である。

35歳以上の者を対象に胃癌検診が行なわれている。毎年、年度当初に検診のお知らせチラシと検診申し込み用紙を保健推進委員を通じて各世帯に配布する。検診の申し込みは胃癌検診、循環器検診、子宮癌検診、乳癌検診、結核検診を一括して実施する。胃癌検診は例年7月から8月にかけて行なわれている。

III 結 果

1. 胃癌検診に関する意識

1) 胃癌検診の体制に関する意識

(1) 胃癌検診を知った方法

胃癌検診を知った方法について受診群・未受診群別に示したものが図2である。

受診群104名中「保健推進委員」が67名(64.4%)と最も多く、次いで「回覧板21名(20.2%)」「広報」19名(18.3%)「検診お知らせチラシ」10名(9.6%)であった。また、健康教育を通じて知った者はいなかった。

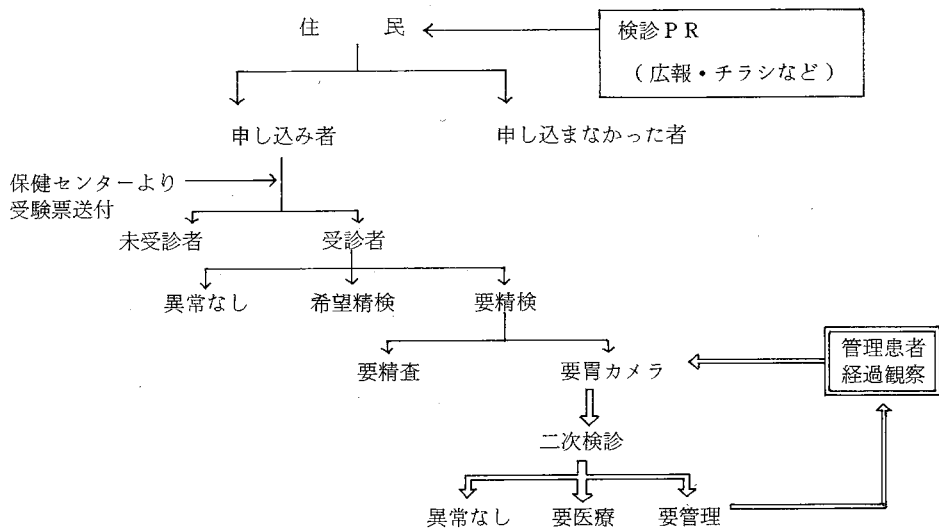


図1 胃癌検診体制

なお、受診群・未受診群ともに胃癌検診を知らないと答えたものは皆無であった。

(2) 検診の申し込みから検診日までの期間

① 申し込んでも受診しなかった者の認識

昭和61年度における胃癌検診申し込み者のうち胃癌検診を受診した者は65.8%であり、申し込みした者全員が受診したわけではない。

そこで、未受診群107名中過去に胃癌検診の申し込みをしたことのある者16名の未受診理由をみると「都合が悪かった」「忘れた」などであった。

② 検診実施までの期間に関する知識

未受診群107名の検診日までの期間に関する意識を示したものが図3である。

検診申し込みから検診日までの期間について「長い」と感ずる者が107名中16名(15.0%)「ちょう

ど良い」が10名(9.3%)であり、「短い」と感じている者はいなかった。

(3) 胃癌検診に対する意見

① 胃癌検診を受診しての不満

受診群104名のうち検診に対して不満を感じている者は66名(63.5%)でありその内訳を示したものが図4である。

不満がある者66名中、「待ち時間が長い」39名(59.1%)が最も多く、次いで「検診後下痢又は便秘になる」、「会場まで遠い」、「雰囲気が悪い」の順であった。また、「その他」の中には「検診結果の知らせが遅い」とする者が1名みられた。

② 未受診群の胃癌検診に対する希望を示したものが図5である。未受診群107名中「自分の都合の良い日又は時間に受診できれば良い」29名(27.1

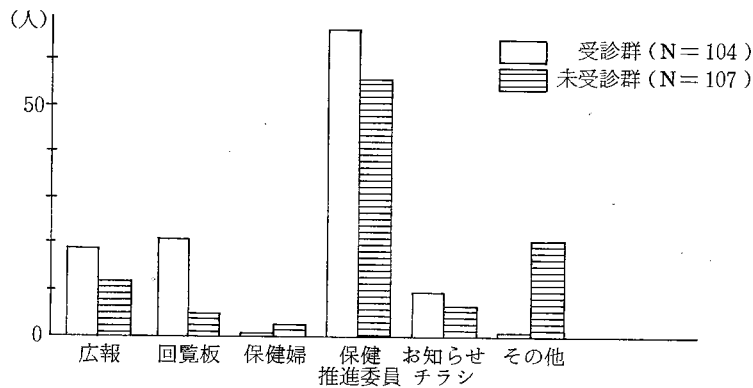


図2 胃癌検診を知った方法

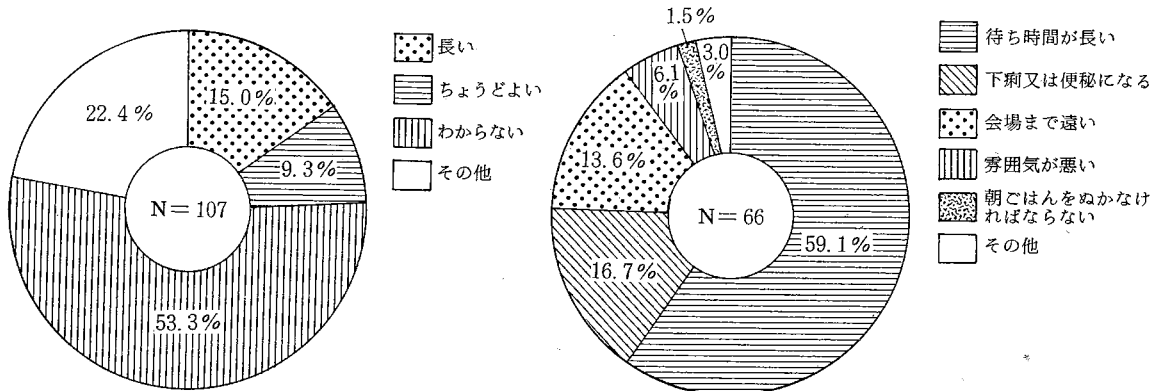


図3 検診申し込みから検診日までの期間

図4 胃癌検診を受診しての不満

%)が最も多く、次いで「短時間で検診ができれば良い」、「予約制にして待ち時間をなくせば良い」、「検診を無料にすれば良い」の順であった。

2) 受診行動に及ぼす影響

(1) 胃癌検診の必要性

受診群104名の必要性の感じ方を示したのが図6-1である。

受診群104名中「必要だと思う」97名(93.3%)が最も多く、「どちらでもない」、「必要だと思わない」は若干みられただけである。

未受診群107名の必要性の感じ方を示したものが図6-2である。

未受診群107名中「必要だと思う」75名(70.1%)「必要だと思わない」15名(14.1%)であった。

検診の必要性の認識は、受診群に有意に高率であった(P<0.05)。

(2) 胃癌検診の必要性と未受診理由

未受診群107名中、胃癌検診を必要だと思っている者75名の未受診理由を示したのが表2である。

検診を必要と思っている者75名中、「都合が悪かった」20名(26.7%)と最も多く、次いで「胃癌検診は苦しいから嫌だ」、「病院に通院している」、「自分は健康だから必要ない」、「めんどくさい」であった。

胃癌検診を必要だと思わない者15の未受診理由は「病院に通院している」、「自分は健康だから必要ない」、「他の検診を受けたから必要ない」、「めんどくさい」などであった。

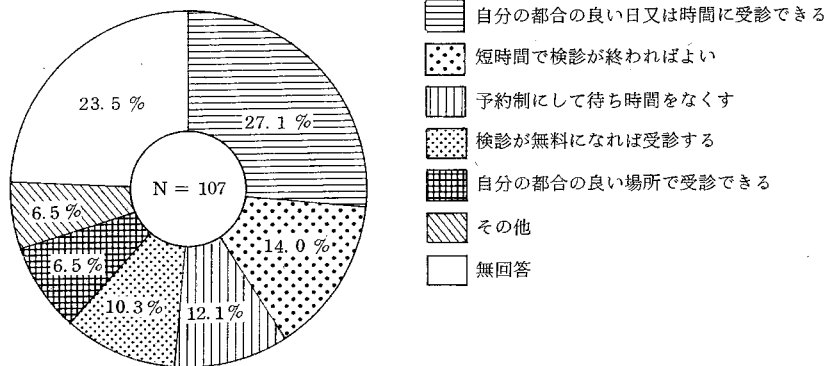


図5 胃癌検診に対する希望

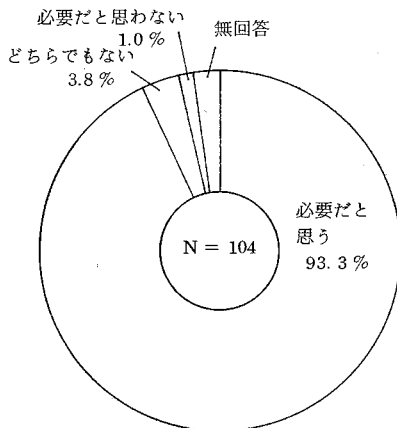


図6-1 受診群における検診の必要性の感じ方

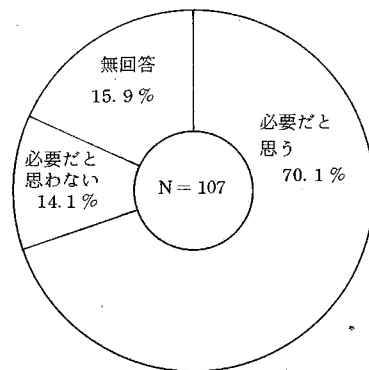


図6-2 未受診群における検診の感じ方

表2 検診を必要だと思ふ者の未検診理由

未 検 診 理 由	人 数 (人)
都合が悪かった	20
胃癌検診は苦しいから嫌だ	12
病院に通院しているから	11
自分は健康だから必要ない	5
めんどうくさい	5
他の検診を受けた	3
胃癌検診があるのを忘れていた	3
会場まで遠い	1
その他	15
計	75

2. 健康に関する意識

1) 健康に対する不安

健康に対する不安を受診群・未受診群で比較したものが図7である。

健康に対する不安について、「不安がある」と、「少し不安がある」を合わせて、「不安を感じている」とし、「あまり不安はない」と「不安はない」を合わせて、「不安を感じていない」とすると、受診群では、「不安を感じている」68名(65.4%)、「不安を感じていない」31名(29.8%)であった。未受診群では、「不安を感じている」59名(55.1%)、「不安を感じていない」40名(37.4%)であった。

(1) 胃癌検診の必要性と健康に対する不安

受診群104名の胃癌検診の必要性の有無と健康に対する不安の感じ方をみると、「検診を必要だと思う」97名中、「不安がある」と「少し不安がある」66名(68.0%)、「あまり不安はない」と「不安はない」28名(28.9%)であった。

未受診群107名の胃癌検診の必要性の有無と健康に対する不安の感じ方をみると、「検診を必要だと思う」75名中、「不安がある」と「少し不安がある」45名(60.0%)、「あまり不安はない」と「不安はない」25名(33.3%)であった。

(2) 健康に対する不安と受診動機

受診群の健康に対する不安の感じ方と受診動機をみると、健康に「不安がある」と「少し不安がある」68名中、「自分の健康に不安を感じたから」が26名(38.2%)、次いで「保健婦又は保健推進委

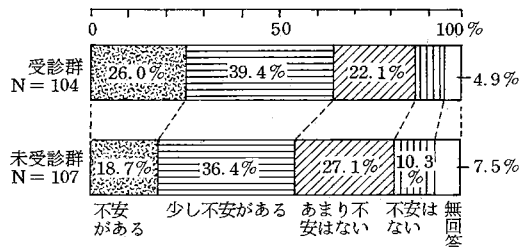


図7 健康に対する不安の感じ方

員にすすめられた」であった。

「あまり不安がない」と「不安はない」31名中、「自分の健康に不安を感じた」7名(22.6%)、次いで「新聞・テレビ・雑誌などで検診が必要と思った」であった。

(3) 健康に対する不安と未受診理由

未受診群107名の健康に対する不安の感じ方と未受診理由をみると、

「不安がある」と「少し不安がある」59名中、「病院に通院している」17名(28.8%)、次いで「都合が悪かった」14名(23.7%)であった。

「あまり不安がない」と「不安はない」40名中、「都合が悪かった」と「自分は健康だから必要ない」が10名(25.0%)であった。

IV 考 察

1. 検診体制に関する意識

1) 検診の申し込みから検診日までの期間

胃癌検診の申し込みから検診日までの期間について、未受診群は「長い」と感じている者がおり、また、受診を希望して申し込んでも受診日を忘れていたり、都合が悪くなったりしたため受診できなかった者がいた。このことから、未受診群が受診行動に結びつくためには、胃癌検診の申し込みから検診日までの3~4カ月の間の検診PRが不足であると考えられる。また、未受診群に対し、繰り返しのPRや地道な健康教育活動が必要である²⁾、と言われることから、検診のPRが不足であると考ええる。

胃癌検診を知った方法として、受診群・未受診群ともに「保健推進委員」が最も多く挙げられて

いる。

これらのことから、申し込みから検診日までの期間に、住民と多く接触している保健推進委員を通じた個別的な周知の徹底が必要であり、最も有効であると考ええる。

2) 胃癌検診に対する不満と希望

胃癌検診を受診しての不満は「待ち時間が長い」が最も多い。また、未受診群の検診に対する希望をみると、「自分の都合の良い日又は時間に受ける」「短時間で検診が終われば受ける」など約55%の者が検診に要する時間の短縮に対して希望をもっていた⁶⁾。つまり、現代は、生活行動が時間に影響される面が大きく、住民が効率的に検診を受けたいという意識をもっていると考ええる。そのため、宮島⁴⁾が、待ち時間を短くする工夫をして受けやすいよう配慮すれば1人でも多く受けてもらうことは可能だと思われる、と述べているように、検診に要する時間を短縮出来る体制づくりが必要であると考ええる。

2. 胃癌検診の受診行動に及ぼす影響

1) 胃癌検診の必要性和受診行動

胃癌検診を必要だと思っている者は未受診群に比べ受診群の方が多くなっている。これは、胃癌検診の必要性を感じている者ほど受診行動に結びついていると考えられる。未受診群の中には検診を必要だと思わない者がおり、その者の未受診理由は「自分は健康だから」「めんどくさい」等であった。その反面、検診を必要だと思う未受診群もいることから、一概に未受診群は検診の必要性を感じていないとは言いきれない。

検診を必要だと思っている者の未受診理由をみると、「胃癌検診は苦しいから嫌だ」など胃癌検診を正しく理解していないと考えられる。そこで、検診の方法などを説明して正しい知識を持つことによって受診行動に結びつけるような働きかけが必要である。

また、胃癌検診を必要だと思っていない未受診群に対しては、胃癌検診の意義及び有効性などを健康教育を通しPRをすることによって検診の必要性を認識させるべきであろう⁵⁾。

2) 胃癌検診の必要性和健康に対する不安

受診群ほど健康に対する不安があり、検診の必要性も感じている傾向があり、その者の受診動機は「自分の健康に不安を感じた」が多くなっている⁶⁾。

未受診群で健康に不安がある者の未受診理由は、「都合が悪かった」「病院に通院している」が多い。健康に不安を感じていない者の未受診群理由は「自分は健康だから」が多い。

このことから、健康に不安を持っている者ほど、検診の必要性を感じ、受診行動に結びついていると考えられる。

以上のことから、未受診群に対する受診勧奨は、住民と多く接触している保健推進委員を通じ受診行動に結びつくように胃癌検診の必要性を認識させると同時に、個別的な周知の徹底や動機づけが必要と考えられる。また、住民に対して常に自分の健康状態を把握できるよう認識させ、健康管理の必要性・胃癌検診の必要性を健康教育・健康相談等で理解させる必要があると考える⁷⁾。

検診体制については、住民の不満・希望を考慮し時間的な工夫をする必要があると考える⁸⁾。

V 結 論

宮古市における胃癌検診について、津軽石地区をもとに調査した結果以下のことがわかった。

1. 胃癌検診率を高めるためには、自分の都合の良い日又は時間にでき、さらに短時間で検診が終わるような体制が必要である。
2. 健康に対する不安が受診動機に結びつく傾向がみられた。

謝 辞

最後に、この研究をすすめるにあたり、ご指導、ご助言くださいました宮古保健所並びに宮古市保健センターの皆様へ深く感謝いたします。

文 献

- 1) 淵川在彌：胃集検の目的と意義，公衆衛生，

- 51, 177~182, 1987.
- 2) 小野昭雄：胃癌に対する行政施策，公衆衛生，51, 204~209, 1987.
 - 3) 大島明：胃癌の早期発見と集団検診，看護技術，34, 67~70, 1988.
 - 4) 宮嶋久美：循環器検診未受診者の実態と対策，保健婦雑誌，39, 67~74, 1983.
 - 5) 小野昭雄：老人保健制度の現状と課題，公衆衛生，51, 76~84, 1987.
 - 6) 加藤育子，富永祐民，成橋廣昭：胃癌検診受

- 診群の特徴，日本公衛誌，33, 749~753, 1986.
- 7) 湯沢布矢子：老人保健法と保健婦活動，公衆衛生，48, 644~649, 1984.
 - 8) 宮下美生：胃集検の精度管理と事後管理，公衆衛生，51, 183~189, 1987.

著者への連絡先：

〒028-41 岩手郡玉山村大字茨民字泉田77-1

玉山村役場 Tel. 0196-83-2111

太布春美